

ももさと 通信

2022年
11月1日
第6号

〈発行〉社会福祉法人桃郷 〒649-6112 和歌山県紀の川市桃山町調月58番地3 TEL 0736-66-8851 FAX 0736-67-8851



すべての子どもに豊かな育ちを

URL <https://www.momosato.com>
E-mail mososato@galaxy.ocn.ne.jp



夏休みだからこそその経験

あすなろつばさ 小万 和紀

やっときた！待ちに待った夏休み。放課後ではなかなかできない遊びや体験ができる夏休みでもあります。普段の放課後とは違い、じつくりとやりたい事に夢中になれる時間が長く、達成感や充実感もより深いものになります。

今年の夏も猛暑日が続く中、川遊びは夏休み活動一番の楽しみです。川の流れを楽しみ、魚を探して気づけば一緒に泳いでいる事に大はしゃぎしてしまう。岩場で足を滑らせてしまい、そのまま身体も流れ、浮き輪だけが流れているような光景もしばしば。

時間をかけてあげられる分、お出かけ場所もいつも以上に遠方に行く事もできるのが一日活動の良さです。車を南へ走らせ、広川町の遠浅の形状で知られている西広海岸で、海沿いの生き物探しが始まりました。捕まえた生き物の名前が気になり、知りたい気持ちで友だちと「何だろう」という思いで大人たちと一緒に調べたり、写真を撮ったり、部屋に戻って図鑑で調べたり。捕まえようと追いかけていく内に気付けば服がびしょ濡れに。帰路の車内はぐっすり眠っていました。

毎年恒例、お祭りイベント内の一つ「盆踊り」。中高生のみなどと一緒に炭坑節の曲に合わせて大きな輪となり、定例活動で行っている「竹ドラム」からヒントをもらい、自分たちで発足した「太鼓部」メンバーで、踊りと一緒にこれも事前で作っていた段ボールと太鼓の演奏も登場し、太鼓を囲んでの輪が。

夏休みは友だちと関わる時間が長くなります。学校という形ではない、友だち同士で作って上げていく時間は、自信につながっていく時間でもあると思います。学校から帰ってくる放課後の居場所から、一日という充実した時間の過ごし方がさらに心と身体の成長になっていける居場所でありたいと思っています。夏休みだからこそその経験は子どもたちだけでなく、私たち大人も「力」をもらっています。

法人設立30周年を迎えるにあたり 「ひまわり園」の開設当時の保育は

1993年（平成5年）に社会福祉法人桃郷が設立され、来年度で30周年を迎えます。無認可施設「ひまわり園」を経て、法人施設として現在の「ひまわり園」が桃山町（現紀の川市）でスタートしたのが、1994年（平成6年）4月です。
開設当時の保育の様子を振り返り、関係者の方々に話をいただきました。

- 出席者 山本 志保美様（元ひまわり園保育士）
 鈴木 悦子様（元ひまわり園保育士）
 船木 栄子（常務理事、元ひまわり園園長）
 和田 磨美（ひまわり園副園長）
 司会 山本 翔太（相談支援事業部長、発達相談員）

司会：相談支援事業部長の山本です。はじめに自己紹介からお願いします。私は京都で行政の仕事をしていましたが、療育にもっと関わりたいと思っていました。山本耕平先生（社会福祉法人一麦会理事長、佛教大学教授）や先輩発達相談員の方から、ひまわり園を紹介していただいたことがきっかけで、このような環境で働きたいと思い、和歌山へ移り住み、現在に至っています。

和田：ひまわり園保育士の和田です。ひまわり園開園当初から、ずっとひまわり園で保育士として働いていましたが、5年前に橋本市にある「つくしんぼ園」に異動しました。新しい出会いや学びもありましたが、今年から、ひまわり園に戻ってきました。

山本：当初3年間の約束で就職させていただきました。それが5年になり10年になりました。今に至るとは夢にも思っていまわりました。民間という自由度の高い職場で働かせていただき感謝していますし、

設立された船木理事長、常務理事ご夫婦を大変尊敬しています。法人を退職してからは、保育指導という形で各事業所に入らせていただいています。30年という節目のこういう場に参加させていただきました嬉しく思っています。今に続くお話ができればと思います。

鈴木：ひまわり園で保育士をさせていたいただいたのは開設して3年間です。その頃生まれた長男は26歳になりました。現在は和歌山市にある、社会福祉法人一麦会の「むぎピース」（就労継続支援B型）の管理者をしています。当時の保育歴、1年目、2年目でやっとおむつが取れた子どもたちが、大人になって私の事業所に現れる、人間として豊かに生きるということはこういう事なんだと目の当たりに感じています。

船木：私は20年間保健師をしており、多くの皆様のご協力があり、認可施設ひまわり園の初代園長として携わってきました。保健師として、子どもの育ちは分か

っても、どのように子どもを育てるか、集団で保育するということに自信がありませんでした。知らない、分からないところからスタートし、30年が経つのは、皆様方のご協力があったからこそ思っています。

司会：ひまわり園を開設した当時、保育の現場はどのようでしたか？

鈴木：もし、私に子どもがいて、当時のひまわり園に通園させようと思うと心配です。あの頃の保育士（私）に子どもを任せて大丈夫かなと思います。先輩保育士から教えていただいたこともありましたが、全て試行錯誤の中での保育でした。

船木：特別なことをしなければいけないという保育でした。部屋の中で、マットのspringで飛んだり跳ねたり、プレイルームの柱にブランコをつけ、子どもが来たら荷物も丸投げにしてブランコで遊ばせる。それが療育だと思っていました。いわゆる「感覚統合療法」で、当時の保育はと聞かれるとそういうイメージがあります。

鈴木：「感覚統合療法」の研修にも行きました。

山本：開園1年目の夏にひまわり園を見学した時に、大きなプールに水が入っていました。子どもがプールに入っていました。「なぜ入らないの？」と聞いたら、「井戸水で冷たいから」ということで、それなら、考え直したほうがいいのではとアドバイスしたことがあります。2年目に就職した際には、日常の保育士の労力のことも考え、そのプールを使わないことにしましたが、当時の発達相談員の両角先生から、「子どものプール遊びはどこで保障するの？」と叱られたことがあります。

鈴木：今だったら、水を少なくして冷たい水を温かくしてから入れてあげ、冷たい

水をかけて遊ぶこともできたのに、当時は思い浮かびませんでした。
和田：子どもが好きな遊びをするばかりで、子どもたちを集団として活動に惹きつけていくという思いそのものがあったと思います。

船木：岸和田市立パピースクールから山本先生が見学に来てくれた時、食事の際でしたが、座って待たせ、全員揃ってからアンパンマンの歌を歌ってから食事をしました。山本先生から「何で我慢させるの。食べたくて仕方がないのに、なぜアンパンマンの歌を歌ってから食べさせるの？準備が揃えば食べさせてあげたらいいのに」と言われたことがあり、「そうだな。大人でもつまみ食いをしてでも食べるのに、子どもに食事の我慢させるのはダメだな」と思ったことがあります。

山本：当時は、まだ、保育リズムやデイリープログラムが確立されていませんでした。我流の保育で、同じことをしてもA先生は叱るし、B先生は叱らないなど、まだ開園1年目、2年目なので前提となるものがなかったと思います。私が見学に行ったときに、昼寝をする子もいるし、昼寝をしない子もいたので、子どもにとって睡眠は生活のリズムで大事なものとアドバイスしたことがあります。

和田：保育科を出て学校で学んだことがたくさんあるのに、療育という現場では分からないことが多いとあり、職員の考え方もバラバラだったし、芯になるものがないのでみんなそれぞれの対応でした。
山本：やってみて、一から積み上げていかなければならない時期だったと思います。

司会：1日の流れ（デイリープログラム）が定まってきたのはいつ頃ですか？
和田：1年目の秋頃にリーダー制が入っ



座談会の様子

てからで、それまでは、各教室はバラバラでした。

山本：2年目にリーダー制に基づいた役割の見直しや修正をしていきました。リーダー、サブリーダー、グループリーダーを決め、この時間だったらこれと役割が決まっていれば、それが、みんなの動きになっていきます。リーダーはその日の責任者で、その日の保育の流れを先頭に立って作る役割を果たします。

司会：開園当時の児童数と職員数はどれくらいでしたか？

船木：子どもの数は25名で年齢別に3クラスに分かれ、職員は10名程度、そのうち正職員は6名程度でした。

司会：子どもと職員の配置のところは今と変わらないですか？

鈴木：各教室に先生はいましたが柔軟な動きはできていませんでした。

司会：手探りだったというのがよくわか

ります。

船木：お帰りまでの6時間あるがままなすがままの保育で、古田先生（元パピールスクール園長）に叱られたこともありました。

鈴木：療育は特別なことと思っていて、「普通」のことをやる、例えば、座ってご飯を食べる、トイレに行きたいときはトイレに行くという「普通」のことというのが当時は理解できていませんでした。古田先生や山本先生からの指導で「普通」に保育するということの気づきがありました。

和田：当時は、子どもをかわいがる、子どもを受け入れることの全てが保育だと思っていたので、本気で叱ったことがないし、叱る以前に本気で子どもに向き合っていたいなかったのではと、先生方の指導で気づきがありました。子どもを大事に思うこと、そして、子どもたちに「どんなふうになってほしいのか」という願いを持つこと。そのために、私たち大人が何をするかということに繋がりを見いだせませんでした。

山本：早い時期にそういう気づきがあり、1年、2年で修正をしていって、今があり、発達、療育、人権、障がいを理解してきたのだと思います。それは、法人の理念もさることながら、船木園長のリーダーシップがあったからだと思います。

船木：子どもの願いを聞くということではなくて、当時は、教えるということが前面に出ていました。絵本も子どもの気持ちを汲むのではなく、保育士が選んだ絵本を読むというスタイルで、共に楽しむということではありませんでした。

山本：本棚に本はきつちりとありました。置いてある場所が悪くて、移動してもらったことがあります。

鈴木：山本先生は、「背表紙だけ見せても

子どもが分からない」と言っていて、子どもに表紙が見えるように並べてくださりました。

山本：私の指導がすぐに受け入れられると思っていまらなかったが、鈴木先生や和田先生がはつきりと言ってくれたので、とりあえずやってみて、駄目だったら次に考えようという方針でした。例えば、散歩も保育士の一方的な思いでなく、子どもたちの要求の姿をまず大切に、見通しを持って取り組んでいくよう、現場の保育士が変えてくれたから、今の素敵な散歩のスタイルになっています。失敗して、子どもが答えを出し、自分たちで変えていく、そして、子どもが楽しく、大人も安心して見られるような保育に自分たちで掴んで変えていったと思います。

鈴木：その頃の自分の反省として、駄目だったことをみつけることばかりで、今日の行程で楽しかったことを見つけたとができずにいたのですが、「良かったやん。子どもたちが楽しい場所を見つけれられて」と言われ、反省というのは駄目なことをみつけることではなく、いいことも悪いことも含め一日を振り返ることだと知りました。

司会：お話を伺い、今は、どの職種もいかに失敗しないように計画を立てるかというところになりがちです。しかし、思い切ってやってみて、あとで振り返りをきっちりすれば、たとえ、失敗しても次



山本様

につながるのではと思います。

山本：保育の話し合いの仕方や職員会議の内容も大事にしないといけないと思います。たまに、職員会議に入らせていただくこともありましたが、保育士の思いが実践にどう繋がったのか、もつと、深く掘り下げないと感じます。行事が多くて忙しいのかな。

司会：他に困ったことや葛藤したことはありますか？

鈴木：当時、保育に失敗する夢をよく見て、和田先生とお互いに気をつけようと言っていました。家に帰ってまで保育のことを思っていたのは、私たちに任せて下さる方がいたからだと思います。

船木：葛藤といえば二つあります。一つは、ボランティアでよく遊びに来てくださる友人から「こんなバラバラの保育でいいの？」「子どもに何を身につけてもらいたいと思っているの？」と指摘を受けて気づかされました。まずは、子どもの命を守ることに、そして子どもらしい生活を体験させていくことが保育なんだということ、当たり前なことを教えられました。そして、もう一つは、このような保育をしていると保育士が足りず、子ども1人に対して保育士1人がつきつきりになり、慢性的に保育士不足で次々とパート保育士を雇わなければならなくなりました。和歌山には私たちが目指す療育・保育のモデルがありませんでしたので、園長として夜は眠れないし、ストレスで髪の毛が抜けていく毎日でした。ところが、パピールスクールの保育の方法を取り入れていくと、それが嘘のようになくなりました。そのおかげで、保育の力は凄いものだと思えました。

山本：2年目の頃だと思えますが、毎日毎日、園長室に数人の保護者がおしかけては、園長と話をされているので驚きま



鈴木様

した。職員会議で船木園長から保護者からの要望などを聞くことがありましたが、当時の保護者も熱心でしたので、船木園長も大変だったと思います。

司会：園からの保護者支援など保護者とのかわりはどうでしたか？

船木：保護者の連絡ノートには、例えば先生に名札がないのか、制服がないのか、担任がいらないのかなど書かれていました。今思えば、保護者の方にとっては地域の保育所と同じことをさせてあげたいということでの要望だったと思います。それは、学習会をすることで納得していただきた。保護者の方の中には、「感覚統合療法」にしてほしいと強い要望もあり、それが一番困りました。

山本：当時の発達相談員の両角先生（元立命館大学教授）が、私たちの技量が未熟だということを理解して下さったうえで、発達相談の折に、ひまわり園の保育と子どもの成長の理由を結び付けて説明して下さったので、保護者の方も理解してくれました。

船木：最初の頃は、山本耕平先生がボランティアで発達相談を引き受けて下さいました。その後、両角先生が市町村で発達相談をされていた関係で、ひまわり園に発達相談員として来ていただくようになりまし。両角先生から、保護者教室や発達相談の時に、保育に対する評価を

保護者に伝えていただきました。

山本：いろいろな人のバックアップがあつて保育士の仕事も生きてくると思いますが、亡くなられた上杉先生（全障研元和歌山支部長）や前川先生（和歌山青年学級創設者）も、ひまわり園を「和歌山の宝」と言つて下さり、保健師の方の支えは勿論、どれだけ支えてくれる人を作るかというのが民間では必要だと思ひました。ところで、偏食の子どもへの対応は大変でしたか？

和田：山本先生から失敗して分かるのを待つてくれたというお話を聞いて、「ふりかけ」を思い出しました。偏食は生きづらさの一つの表れであつて、食べたくても食べられない子どもだということが分かるまで時間がかかりました。頑張つたら食べられるようになる。偏食は「わがまま」という認識がどうしてもありません。しかし、それを私たちが理解するまで待つてくれていたんだなあと思ひました。頑張つて食べさせようとしている時に、山本先生が「ふりかけ」を持つていつもやつてくるのがとても嫌でしたが、今は食べられるものを用意して、体だけではなく、心を満たし安心して食事をしてほしいと思つています。

山本：私もパピースクールの時には無理矢理食べさせていました。

和田：長く待つていたのだと思ひますが、当時は根拠のないことに縛られていたし、今も縛られています。今の職員にどう伝えるのか難しいです。

鈴木：子どもも「ふりかけ」の山本先生を待つて、それで、食べるようになりまし。我慢して食べることが大事ではなく、「ふりかけ」でもお昼ご飯を食べ、お腹が一杯になったら、別の献立を食べることができるといふこと、一つ一つの保育の理由付けを両角先生からも教えていた

だきました。

山本：「ふりかけ」から広がつていく、自分から食べたいという気持ちが大事です。

和田：そうですね。無理矢理食べさせず、やればできる」という評価の仕方が、果たして本人の力になつていくのか？回り道や時間をかけ、大人に食べさせられるのではなく、子ども自身が食の幅をひろげていくことが大切だと思います。

山本：ごはんはおいしくて楽しい時間ですもの。

和田：一番頑張れないものだと思います。

山本：新しい課題が見つかりましたね。発達相談員に入つてもらい学習会をしたらどうですか。

船木：ひまわり園の食事は当時からいいものを出していました。唯一、パピースクールから誉めていただきました。

鈴木：子どもの時からの習慣が大人になつても繋がつてきます。コンビ二弁当はおいしいが、調理員さんの作る給食を残す大人もいます。

船木：好きなものを美味しく食べる、どんなに表情が険しくても、食事の時間は楽しく食べる、午前と午後の切り替え、体力をつけるための栄養補給、みんなが食事をするのが社会性に繋がつていきます。幼い頃からのこういう食事の習慣があつて、大人になつたらレストランで食べられるようになります。保育にとつ



司会 (山本)

て、とても大事なところだと思います。

鈴木：まさに「普通」のことですね。

船木：生きる力をつけるために、排せつ、食事、歯みがきと手洗い、着替えを大切にしました。衣服の着脱は清潔習慣を身につけ、プライベートゾーンを守るようになりまし。食事も生きる力に繋がります。また、保育教材として、保護者の負担にならないように布団も園が用意をしました。それが地域の保育所と違うところで、お昼寝が定着してきました。

司会：当時から、保護者の学習の機会を設けていましたか？

船木：1年目、2年目は私の知り合いの先生方に依頼し、年間に4回ほど学習会をしました。両角先生が来られてからは、コーディネートをしていただいて、発達についてシリーズで保護者学習をしました。発達相談の場には、子どもを知つている現場の保育士にも入つてもらつてにしました。園庭の活動をビデオで撮り見てもらうのはお母さん方には好評でした。いろいろな方とネットワークを組み、陰になり支えてくれたパピースクール、当時は目からうろこのことばかりでしたし、子どもたちから学ぶこともたくさんありました。

山本：実践はやつてみないと分からない、理論から入つていっても分からないと思ひます。でも、現場の職員はやつてきたことを言語化して、伝えていく力を持つていく必要があると思ひます。

和田：分からないまま保育するのはしんどくて、ストレスでしたが、目の前の子どもたちが答えを返してくれ、その意味は何だろうと考える毎日でした。当時は、分からないことが多かつたですが、振り返ると分かることが多くあります。

山本：私も、保育士になつた当初、子どもの「指さし」の意味を知らず、発達相

談員に絶句されたこともありましたが、理解できずに保育をすることはしんどいとだと思えます。

船木：当時、保育士は発達への勉強をしていなかったけれど、知らなくてもそのうちに分かって子どもが見えてきたと思えます。

山本：自閉症の子どもの多様性や成長の仕方が見えてきて、偏食でも違うタイプがあるなど分かってきます。この30年間の実践を通して、今の桃郷の各事業所の保育士は、子どもへの対応が上手になってきています。色々な子どもに対応できる力をつけてきていると感じます。

司会：自閉症である前に、一人の人間として必要な生活を保障しなければいけないのに、今の支援の風潮として、自閉症の特性に着目して対応しようとするから、余計に特性を増長させてしまうことにつながってしまうように感じます。理論ありきですという方向に進まない、そういう意味で桃郷の保育は緩やかさがあると思えます。

和田：何が違うんでしょうか。

鈴木：「ふりかけ」が出てきて、満たされて終わる昼食なのか、無理矢理口に放り込まれる昼食、そういう違いではないですか。

山本：子どものしんどさをどう受け止めてあげるので、保育の中身が大きく違ってくると思えます。

船木：子どもが見えてくるということは、子どものしんどさが見えてくるということ、そこで子どもと保育士との信頼関係ができます。信頼関係が成立すると、子どもは言うことを聞いてくれます。それが、30年間で分かったことです。四角四面でいくと子どもとの信頼関係が築けないと思えます。

司会：「受け止め」と「受入れ」は違う



船木常務

のかなと思っています。きちんと子どもの気持ち「受け止め」ることは大切ですが、しかし、それは行動全部を「受入れ」ということは違います。子どもは大人に受け止めてもらいたい、自分のことがわかってもらえることで、信頼関係ができていくのでしょね。ところで、開園当時、職員集団づくりで意識したことありますか？

船木：思いはありましたが、そこまでは考えられなかったですね。むしろ、職場を作るのに頑張れる職員を集めたいという思いでした。

山本：船木園長は、保育士が安心して仕事ができる環境を作ってくれたと思えます。

司会：これからの担う保育士に伝えたいことはありますか？まず、私から言わせていただきます。毎日、反省の場を持っているけれど、マイナス評価だけではなく、きつちりと振り返りに生かすこと、安心して失敗する環境を作ってほしいと思えます。

船木：保育士の生き様、哲学、スタイルが、子どもに関係すると思っていますので、保育士は、保育以外にいろんなことに挑戦していてもいいし、それが保育に繋がると思っています。「ねばならない」ではなく、一遍やってみようという雰囲気を持って臨んでほしいと思えます。



和田

和田：保育が確立したからその悩みがあります。でも、その答えが子どもです。ので、回りの評価や見た目の良さではない本質的なものを大切に保育をしていきたいと思えます。若い保育士には子どもを好きになってほしいし、保育を楽しんでほしい、そして、子どもと日々気持ちを共にし、成長をすぐそばで支えていく保育士という仕事の幸せを感じてほしいです。

山本：30年という実績をきっかけに、課題や実績を自分たちでまとめて実践報告会をしてはどうですか。発達相談員が4名もいる法人はないと思うので、乳幼児期から思春期まで、自分たちがやってきたことを形にして、職員が気づけるような事をしてはどうですか。折角、これだけの実績を残しているのに、職員が知らないというのは勿体ないと思えます。また、この仕事は余裕がなくてはいけませんから、仕事の見直しも、誰かに任せるのではなく、自分たちの中で整理してほしいと思えます。

鈴木：私の現在の職場は深刻な問題がありますが、笑顔で受け止められる自分であるのは、ひまわり園がスタートだったからです。福祉という仕事をずっと続けていっていただきたいです。

司会：これで座談会を終わらせていただきます。貴重なお話を頂戴してありがとうございました。



桃郷の理念



- ① すべての子どもたちが平等な権利を享受し、地域社会に参加できることを目指します。
- ② 保護者、家族、地域と共に学びあい、共に育ちあうことを目指します。
- ③ ひとり一人の子どもの発達を理解し、生活を通して豊かな人生を歩む基礎づくりを目指します。
- ④ 地域福祉の担い手として、地域ニーズに応える取り組みを実践します。
- ⑤ 保健、福祉、医療、教育、地域の皆様と手を取り合い、子どもを支える地域づくりを目指します。



メンタルヘルス研修 (主任研修)を実施

8月18日(木)主任研修として、「職場におけるメンタルヘルス対策」と題し、社会保険労務士の村上寿味子氏、臨床心理士・公認心理師の永田雅樹氏をお招きして、研修会を実施しました。

主任会議の中で、こういった研修を受けたいか検討する中で、ここ数年、桃郷でもメンタルヘルス不調で休職する職員があるため、今回のメンタルヘルス研修を実施していただく事になりました。研修を受講するにあたって、事前に主任会議で聞きたい内容をまとめました。主任として現場の職員をまとめるといふ役割を担うため、メンタルヘルス不調の症状

やフォロー方法、他の職員への理解、職員の負担にならない指導方法等、どう対応すれば職員をフォローした上で職場を上手く回せるのかといった内容が多くなりました。

実際の研修では、メンタルヘルスを取り巻く状況からメンタルヘルス不調者の症状・原因・対応方法、ストレス要因等をワークや事例を交えてわかりやすく教えていただきました。今回の研修を受講して、メンタルヘルス不調者を早期発見・早期治療に繋げることが大切だと学びました。そのためにも、普段から職場でのコミュニケーションを大切に、「いつもと違う様子」の職員には声掛けを行う等の予防策を講じること、また、もしメンタルヘルス不調者が出た場合は組織として、治療から復帰までをフォローする事が重要だと学びました。今回の研修で学んだことを職員みんなで共有して、それぞれの職員がメンタルヘルスに対する正しい知識を身に付けたいと思います。(法人事務局 明坂拓哉)

和歌山県障害児保育運動連絡会主催の 「新人研修及び全体研修会」に参加

さる7月2日(土) 和歌山北コミュニティセンターにおいて、和歌山県障害児保育運動連絡会主催の「新人研修及び全体研修会」が会場参加とリモート参加で開催されました。「和歌山県障害児保育運動連絡会が果たしてきた役割」と題し、講師は、当法人常務理事の船木栄子が務め、加盟団体から多くの職員が参加しました。

和歌山県障害児保育運動連絡会(会長・沖殿佳子)は、1987年(昭和62年)に「障害の早期発見・早期療育の体制をつくりあげ、子どもたちの豊かな発達を保障するため」に設立され、現在は20団体加盟、保護者や保育士の願いを受け、国・県・市町村への要望活動や学習会・研修会を実施しています。当法人からも多くの職員が参加しましたが、新人職員2名の研修後の感想文をご紹介します。

今回学んだのは、「保育に必然性を持たせる」ということ。実践の中で「普通の生活の中で育つてどういうことか?」と考えることがありました。生活の中に必然性(〜の時は〜する)を持った丁寧な保育をすることが、「一日の見通しを持つ力」「日々の生活を理解すること」だと学びました。療育の場とは、必然性を意識しながら、子どもたちと一緒に楽しみ、子ども自身が生活の主人公になること・家族や友達と関わる楽しさなど「子ども自身の世界を広げていく」、そんな場所だと改



めて感じました。

今、当たり前のように療育施設があるのは、当時の保護者・先輩方・障保連が子どもたちの育ちを願い、運動をおこし、今も継承される保育の基礎をつくってきたからこそ。今、新人である私たちができることは、療育が当たり前ではなかった時の覚悟や願いを振り返り、引き継ぎ、保育・療育を深めることだと思います。法人事務局職員として、たくさんの方の願いが詰まった大切な療育の場を絶やすことなく続けること、そして、今利用している子どもたちだけでなく、これからの子どもたちが「当たり前」に療育を受けられる環境を作っていくことだと思います。(法人事務局 小谷 祐一郎)

今回は大変貴重なお話ありがとうございました。子どもたちの行動にある必然性。どれも成長にとつて大事な行動だから、決して止めさせたり、注意して行動を縛ってはいけないのだと感じました。船木先生の子どもたちに対するお話を聞き、私もこれからの子どもたちの出会い・交流が楽しみにになりました。発達にさまざまな子もいますが、通園できる施設があるのも、船木先生をはじめ、運動にかかわってくださった先人たちのおかげであり、その思いを引き継がなければと思います。(ひまわり園保育士 岡崎 葵)

発達講座⑥

発達をみつめて

児童発達支援センター つばみ園
発達相談員 下地 咲紀

前回は、笠原先生が乳児期後半から1歳半頃の発達についてお話してくださいました。今回はそのバトンを受けて、2、3歳頃の発達についてお話していきたいと思えます。

1歳半頃に獲得した「ダハナイ、ダダ」と比べて選択する力は、2歳半頃になると、頭の中でイメージする力（表象）や記憶力の発達により、2つの物事を関係づけて捉える力（対の認識）や、「シテカラ、スル」という短い見通しをもった思考や行動様式へと展開していきます。この対比的な捉えは、「大ー小」という目に見える性質から始まり、「好きー嫌い」という価値づけや、「デキルーデキナイ」といった自己の捉えにもつながっていきます。

また、1歳半頃に獲得した話しかたは、展開していくのも2、3歳頃の特徴です。五感を使い、知り分けたことを表情やことばで表現できるようになってくるこの時期は、形容詞を獲得するなど、語彙が爆発的に増えていきます。一、三語文や、

問いと答えによる簡単な対話が成立し始め、表象や記憶力の発達に支えられて少し前のことを思い出して話したり、「あとで」などの少し先を期待する言葉を口にして自分に言い聞かせながら、少しだけ我慢するようになり始めます。

広がってきた表象や話しことばの力を介して、身振りやことばによ

る見立て・つもり活動が盛んになり、生活を再現する遊びが展開されていきます。さらに、共通のイメージや思いをもつ遊びを「一緒に楽しむ」ことを通して、仲間関係も広がっていきます。

2、3歳頃は、自我が拡大・充実していく時期でもあります。自分の考えや行為をより具体的に意識できるようになり、同時に身体運動や手指の巧緻性も高まっていくため、自分で実現できることの幅が広がり、生活のあらゆる場面で「大きくなった自分」を実感しながら自立へと向かっていきます。

世間的には「イヤイヤ期」と呼ばれ、大人の指示には「イヤー」「ジブンデ！」と強烈に主張したり、3歳を過ぎる頃には「へ理屈」をこねたりと反抗を示すため、大人は手を焼きますが、それは「他者から独立した主体性をもった自分」を確かめているかのような姿といえ、この姿がやがて自立へとつながっていきます。したがってこの時期は、安心できる人間関係の中で、自分の意図や要求をしっかりと主張し、その思いを受け止めてもらうことで「大きな自分」をたっぶり感じていくことが大切になります。また、受け止めてもらえた心地よさや安心感は、他者を受け入れる余裕を持った充実した自我へと向かっていきます。一方で、できない見通しが見えると途端に甘える姿を見せたりと、「大きくなりたくない自分」と、なれるか不安な気持ちとの間で大きく揺れてしまう繊細な姿もあります。こうした心の揺れには、寄り添いつつ、誇らしい自分を実感できるような場や経験を保障し、励ましていく関わりが大切です。

社会福祉法人 桃郷

■ 児童発達支援センター

ひまわり園	〒649-6112	和歌山県紀の川市桃山町調月58番地3	☎0736-66-0995	☎0736-66-1905
つくしんぼ園	〒649-7207	和歌山県橋本市高野口町大野74番地1	☎0736-42-0100	☎0736-43-0200
つばみ園	〒649-6112	和歌山県紀の川市桃山町調月736番地1	☎0736-66-0013	☎0736-66-0023

■ 児童発達支援事業

木の実教室	〒649-6236	和歌山県岩出市首屋370番地17	☎0736-62-0815	☎0736-62-0856
くるみ教室	〒649-6246	和歌山県岩出市吉田228番地1	☎0736-67-7788	☎0736-67-7799
くまの子教室	〒649-7113	和歌山県伊都郡かつらぎ町妙寺146番地2	☎090-3673-9958	

■ 多機能型事業所

あすなろつばさ	〒649-7112	和歌山県伊都郡かつらぎ町中飯降1062番地1	☎0736-23-2900	☎0736-23-2929
---------	-----------	------------------------	---------------	---------------

■ 放課後等デイサービス

青空	〒649-6427	和歌山県紀の川市西井阪224番地1	☎0736-77-0070	☎0736-77-0050
粉河青空	〒649-6531	和歌山県紀の川市粉河1535番地3	☎090-6969-4195	
青空つばさ	〒649-7113	和歌山県伊都郡かつらぎ町妙寺146番地1	☎0736-22-5551	☎0736-22-5561

■ 相談支援事業所

桃郷障害児者相談支援センター				
	〒649-6222	和歌山県岩出市岡田649番地2	☎0736-67-8891	☎0736-67-8892
つくしんぼ相談支援室（つくしんぼ園に併設）				
	〒649-7207	和歌山県橋本市高野口町大野74番地1	☎0736-42-0100	☎0736-43-0200

■ 法人本部

事務局	〒649-6112	和歌山県紀の川市桃山町調月58番地3	☎0736-66-8851	☎0736-67-8851
-----	-----------	--------------------	---------------	---------------

～障害者総合支援法施行後3年の見直し～

今年は、障害者総合支援法3年の見直しの時期にあたります。社会保障審議会障害者部会報告書が出され、論点として13項目が挙げられています。この方向に合わせて、2024年には障害者福祉の大枠が変わっていきます。報告書の13項目の一つに「障害者サービス等の質の確保・向上について」が挙げられており、今後の新たな取組として、

- ① 事業運営の透明性を高める評価の仕組みとして、外部の目を定期的に入れ、介護分野の運営推進会議を参考にした仕組みとして、例えば地域連携会議（仮称）を開催し必要な助言を受け、会議内容を報告する。
- ② 事業所間の学び合いにより地域全体としての支援の質を底上げする仕組みとして、自立支援協議会や児童発達支援センター等が中心になり、お互いに学び合いながら地域全体の底上げを図る。
- ③ 利用者・地域のニーズに応じたサービス提供であるかという観点からの評価の仕組みとして報酬減算によるペナルティを設け、地域連携会議（仮称）としての利用者評価を取りあげる。

など7つの見直し項目が挙げられています。事業所がサービスの質を確保するのは当然のことですが、今回の報告書では、サービスの質を誰がどのような方法で評価していくのか、そもそも質の高いサービスとはどのようなものなのか、報酬減算やペナルティがサービスの向上に繋がるのか、具体的に見えないことが多くあります。障害者総合支援法の改正に合わせ、児童福祉法の改正、障害児通所支援の在り方なども改正される方向になります。現場の保育士や児童指導員は、日々子どもに向き合い、保育に工夫を凝らしています。まずは、子どもの育ちに向き合える環境を整えることが、障害者サービス等の質の確保・向上につながるものと思います。今後の国の動向について、しっかりと把握してまいります。

法人事務局

ご寄贈ありがとうございました。 下和佐 昌弘様

編集後記

気付けば、季節は秋になり…今年度も残すところ半分になりました。4月に新しく仲間入りした子ども達も、1つお兄ちゃん・お姉ちゃんになった子ども達も、みんなみんな心も身体も大きくなったように感じます。

秋は、運動会に遠足に楽しいことがいっぱいです。保護者の方も子ども達と一緒にたくさん楽しんで下さいね。その中で一人一人違った成長を感じて下さいね。今回の「法人設立30周年を迎えるにあたり」の「ひまわり園」の開設当時の保育は「の記事を見て、改めて今の桃郷の療育があるのが当たり前ではないと感じました。また同時に、子ども達も自分らしく楽しくこれからは過ごしていけるように、私自身も日々色々なことを学んでいきたいと思いました。

(宮)

管理者からの施設紹介⑥

児童発達支援事業『くるみ教室』

管理者 平原 さとみ

☆施設の概要

沿革：2020年6月開設
住所：岩出市吉田228-1
定員：10名
利用者：13名
対象年齢：2歳児
保育時間：午前9時～午後3時

☆大切にしている保育目標

- ①子どもらしくのびのびと、自信を持って主体的に活動できる保育の保障。
- ②生活を楽しみながら達成感を積み重ね、基本的生活習慣を身につけていきます。
- ③外遊びや散歩をたくさん取り入れ、五感をくすぐり、身体いっぱい楽しむ中で、丈夫でしなやかな身体作りへと繋がります。
- ④保護者の方の学習や交流の場・安らぎの場・子どもの成長を共に感じる場…育ちあいの場に。保護者の方々と職員、地域と連携し、共に子育てを楽しむ保育を目指します。

☆保育内容

くるみ教室は保護者の方々と離れ、初めて集団生活を送る子ども達が毎日通う場です。2歳児さんという小さな子ども達ですが、毎日元気いっぱいにして頼もしく生活を丁寧にくぐっています。

岩出市の都会(?)にある事業所ですが毎日お散歩に出かけ、虫取りで汗だくになったり、近所の方と一緒に作った畑で野菜の収穫を楽しんだり自然の中で五感に刺激をいっぱい浴びています。また、近所の方に「どこにいったの?」と聞かれると「おさんぽいったの!」とおしゃべりを楽しんだり、いいもの探しで見つけた大きな猫じゃらしを得意げに見せたり…時には散歩先のおばあちゃんと腰を下ろし水筒のお茶を飲みながら軒先でほっこりしてみたり。くるみっ子たちは温かい人や環境に囲まれて育っています。

子ども達にとってお散歩は大冒険!夏のプール遊びですっかり日焼けし、一段とたくましくなったくるみっ子。これからは気候も良くなりお散歩日和ですので、少し足を伸ばしたお散歩もいっぱい楽しんでいきたいと思えます。さあ、次の大冒険はどんな出会いが待っているかな。ワクワクする毎日って素敵ですよ♪